

授業の仕方をどのように教えたらいいか

坂 本 徳 弥*

How Should the Method of Teaching Be Taught?

Tokuya SAKAMOTO

1. 研究の目的

模擬授業演習というのは、筆者が勤務する大学では、学生達に基礎的な授業方法を修得させ、教育実習をスムーズに履修させるための授業である。授業方法については、学びのイノベーション事業（文部科学省 2011年度～2013年度）の成果をふまえて、情報通信技術を活用した「新たな学び」の概念が提唱されるとともに、電子黒板やタブレットパソコンなどのICTを活用した授業方法について理解することが必要になってきている。そこで、第1に、ICTを活用した授業の方法について述べていきたい。

第2に、各学校の重点研究の授業研究会において、講師が授業者の授業にダメ出しをすることがあるが、本来は、授業者が気をつけるべきことを事前に示し、示した内容に照らして授業を評価することが望ましいと思われる。すなわち、授業の法則を示し、研究授業の前の指導案検討の段階で、授業者が気をつけるべきことを示し、授業が成功するように導き、結果としてよい授業であったとほめていくことが必要である。模擬授業演習においても同様であり、授業の法則について提示したい。

第3に、新学習指導要領（2017年3月告示）で示されている「主体的・対話的で深い学び」について、「主体的・対話的な授業」はできるのだが、「深い学び」まで行かないのが課題であるとの話をよく聞く。そこで、「深い学び」まで到達するための方法を示したい。

第4に、学生達が授業方法について次のように誤解していることが多いので、正しい授業方法について説明したい。

- (1) 教科書を見せないで授業した方が、子ども達の考える力がつく。
- (2) 毎時間の導入では、前時の復習をすることが必要である。
- (3) 話し合いでは、間違った答えを発表させてもよい。
- (4) 穴埋めプリントを使用して授業する方がわかりやすい。
- (5) 授業開始と終了時に、日直などが号令をかけてあいさつする方がよい。

* 教育学部 子ども発達学科

- (6) 指導書通りではなく、オリジナルの授業をしなくてはならない。

2. 模擬授業演習の概要

- (1) 大学3年生対象，前期1単位，1クラス22～29名。計3クラス74名を担当。
- (2) 授業の到達目標
基礎的な授業方法を修得し，授業を行うことができる。
- (3) 授業内容
国，社，算，理の4教科において指導案を作成し，模擬授業を実施する。模擬授業では，教師役と児童役，コメント役に分かれ，授業後に話し合いを行う。お互いに意見を述べ合い，切磋琢磨することで，基礎的な授業方法を修得させる。
- (4) 授業の方法
15回の授業の中で，1人10分の模擬授業を2回実施。10分ではあるが，授業らしい活発な活動のある部分の授業をする。児童役が学生なので，「ノートに写す」，「考えをまとめる」などの児童の活動時間を大幅に短縮することが可能であり，10分であっても中身の濃い授業をすることが可能である。
- (5) 授業の評価
①学習意欲を喚起できたか。
②めあては明確か。
③児童の活動があったか。
④板書は適切か。
⑤めあてとまとめの整合性
※他にもいろいろあるが，主に5つの視点から評価する。
- (6) 授業計画
①示範授業ビデオ視聴，模擬授業実施の計画作成
②示範授業ビデオ視聴，学習指導案作成方法理解
③示範授業ビデオ視聴，授業技術の法則理解
④示範授業ビデオ視聴，1回目の指導案検討
⑤～⑨模擬授業1回目 1人10分，1日に4～5人ずつ5日間。
⑩ ICT 活用技術の事例紹介，2回目の指導案検討
⑪～⑮模擬授業2回目 1人10分，1日に4～5人ずつ5日間。
- (7) 授業の環境
電子黒板（テレビ一体型）1台，タブレット10台，Wi-fi ルータ1台。デジタル教科書（小学校国語1～6年，算数1～6年，社会3～6年，理科3～6年）
- (8) 授業のリハーサル
授業時間外に，個別指導。74人の学生に1回ずつ計74回のリハーサルを実施した。2回目は，希望者のみ授業相談に応じた。電子黒板やタブレットは，学生にとって身近なものではなく，デジタル教科書も学生が自由に使用できる環境ではない。そこで，個別のリハーサルを実施する中で，ICTの活用の仕方を丁寧に学生に説明する必要がある。

(9) 授業後の授業改善ノート

模擬授業の様子はビデオで記録し、クラウド上でクラスの学生だけが視聴できるように設定した。学生は、スマホ等から自分達の授業ビデオを視聴し、授業改善ノートを記入し、ネットから提出することができる。この方法のよい点は、授業ビデオ記録をDVD等にコピーした場合は、模擬授業をした学生だけにDVDを配付するので視聴できる学生が限られてしまうが、クラウド上で視聴する場合はクラス全員の学生が簡単に視聴することができる点である。

3. ICTを活用した授業の方法

「教職課程コアカリキュラム」（文部科学省，2017）によれば、「教育の方法と技術」だけでなく「各教科の指導法」においても「情報機器及び教材の活用を含む」と記載されており、全ての教科の授業で情報機器及び教材の活用を推進することが求められている¹⁾。最近では、電子黒板とタブレットPCを活用した授業の推進が重要だと思われる。

しかし、小学生や中学生時代に、これらの機器を活用した最新の授業を経験していない学生にとっては、ICTを活用した新しい学びのイメージを持つことが難しいと思われる。従って、教職を志望する学生に、ICTを活用した授業の仕方を理解させるために示範授業ビデオを視聴させ、新しい学びのイメージを持たせることは必要と思われる。

そこで、電子黒板やタブレットPCなどのICTを活用した授業ビデオを編集し、基礎的な授業技術を紹介する示範授業ビデオを8本制作した。

(1) ICT環境の整備

「新たな学び」とは、「1人1台の情報端末、電子黒板、無線LAN等が整備された環境の下で、ICTを効果的に活用して、子供たちが主体的に学習する」学びのことである²⁾。また、協働学習を実現するためのソフトウェアとして、パイオニア社のxSyncを使うと、教師用の画面に表示したワークシートなどを複数の児童・生徒のタブレットPC画面上に一度に配信することができる。生徒はタブレットPC上のワークシートに自分の考えを記入し、すぐに教師用の電子黒板等に送信することができる。こうしてクラス全員の考えを電子黒板の画面で比較したり修正・追加をしたりして新たなアイデアを生み出していくことができる。

(2) タブレットPCを活用する効果

タブレットPCは、電子黒板と連携し、協働学習をするのに適している。タブレットPCを活用する場合の効果はいろいろあるが、主なものとして次の3つが挙げられる。

- ①学級全員の一人一人の意見が電子黒板上で把握でき、同じ考えをまとめたり、異なる考えを比較することが容易になる。
- ②児童・生徒が意見を発表する時に、自分が描いた図などの資料をすぐに電子黒板に表示できる。
- ③授業中にわからないことがあれば、タブレットPCのインターネット検索機能を使ってすぐに調べることができる。

(3) 「新しい学び」のイメージ

「新しい学び」のイメージは、以下の通りである。

- ①電子黒板と複数のタブレット PC を無線 Lan で接続した学習環境で実施することが多い。
- ②協働学習を中心とした授業
- ③一般的な授業の流れ
 - i 本時のめあては何かを、児童・生徒に考えさせる。
 - ii 学習課題やワークシートを生徒のタブレット PC に電子黒板から一斉送信する。
 - iii 生徒は自分の考えをまとめ、ワークシート等に記入する。
(実験、観察、調査、インターネットでの調べ学習等を含む)
 - iv グループでの話し合い
 - v グループの考えの発表 (タブレット PC から電子黒板へ送信)
 - vi 全体での話し合い (電子黒板を用いて各グループの考えを比較、検討する)
 - vii 本時のまとめ

(4) 制作した示範授業ビデオ

小学校編 4 本 (算数、社会、理科、国語)、中学校編 4 本 (数学、地理、国語、理科)、計 8 本の示範授業ビデオを制作した。これらの示範授業ビデオについては学会等で発表するとともに³⁾⁴⁾、DVD 配付を通して広く教育関係者に無料公開をしている。(図 1、2)

- ①小学校 6 年算数「順序よく整理して調べよう」(23 分)
- ②小学校 6 年社会「日本とつながりの深い国々」(22 分)
- ③小学校 5 年理科「人のたんじょう」(19 分)
- ④小学校 5 年国語「和の文化について調べよう」(21 分)
- ⑤中学校 1 年数学「1 次方程式」(13 分)
- ⑥中学校 1 年地理「日本の過疎・過密問題」(29 分)
- ⑦中学校 1 年国語「具体例を挙げて伝えよう」(15 分)
- ⑧中学校 3 年理科「化学変化とイオン」(22 分)



図 1 授業 DVD (小学校編)



図 2 授業 DVD (中学校編)

(5) 学生たちが実施した模擬授業について

ICT 活用のパターンは、次の 10 通りであった。

- ①学級全員の一人一人の意見を電子黒板上で把握し、同じ考えをまとめたり、異なる考

えを比較する。

- ②児童・生徒が意見を発表する時に、自分が描いた図などの資料をすぐに電子黒板に表示する。
- ③授業中にわからないことなどを、タブレット PC のインターネット検索機能を使って調べさせる。
- ④学習課題やワークシートを児童・生徒のタブレット PC に電子黒板から一斉送信する。
- ⑤児童・生徒に自分の考えをまとめさせ、タブレット PC のワークシート等に記入させる。
- ⑥グループの考えをタブレット PC に書いて電子黒板へ送信させる。
- ⑦電子黒板を用いて各グループの考えを比較、検討する。
- ⑧デジタル教科書にある動画を電子黒板で視聴させる。
- ⑨電子黒板でインターネット上の動画等を視聴させる。
- ⑩国語などでデジタル教科書の範読を聞かせる。

(6) ICT を活用した模擬授業の例

① 2年算数「長さ」

- i 本時目標 長さ比べの方法を考え、普遍単位の必要性に気付くことができる。
- ii 学習問題 釣った魚の長さ比べをしよう。
- iii ICT の活用
 - ・電子黒板で魚釣り場面を拡大表示し、どんな問題かをクラス全体で話し合い、理解を深める。(図3)
 - ・ウサギとリスのどちらの魚が大きいかについて、児童一人ひとりがタブレット PC に理由も付けて書いて、電子黒板に送信する (xSync ソフトを利用)。
 - ・児童一人ひとりの考えを電子黒板に表示し、クラス全体で考えを整理する。(図4)



図3 電子黒板に学習問題を表示

うさぎとリスの こぶしの大きさが ちがうので わからない。	わからない。 りすとうさぎの こぶしの大きさが ちがうから。	うさぎのこぶしの 方が大きいから。
1グループ	2グループ	3グループ
うさぎの方が長い。 うさぎの方が こぶしが長いから。	うさぎ うさぎの魚の方が 大きく見えるから。	うさぎとリスの こぶしの大きさが ちがうから くらべられない。
4グループ	5グループ	6グループ

図4 児童一人ひとりの考えの表示

(わくわく算数2上(デジタル教科書), 啓林館, pp. 30-31より引用)⁵⁾

② 2年算数「三角形と四角形」

- i 本時目標 三角形と四角形に分ける活動を通して、三角形と四角形の定義を理解する。
- ii 学習問題 動物の家を作るために、直線で動物を囲もう。(図5)

iii ICT の活用

- ・デジタル教科書の動物園の絵を児童のタブレット PC に送信し、児童はタブレット PC に直線を書きこんで電子黒板に送信する（xSync ソフトを利用）。(図 6)



図5 電子黒板で学習問題を提示



図6 児童の考えを電子黒板に表示

(わくわく算数2下 (デジタル教科書), 啓林館, pp. 40-41 より引用)⁶⁾

③5年算数「平均とその利用」

- 本時目標 平均の学習に関心を持ち、平均の求め方が理解できる。
- 学習問題 グレープジュースを3人で等分する方法を考えよう。(図7)
- ICT の活用
 - ・デジタル教科書にある「グレープジュースを3人で等分する」動画を電子黒板で視聴させる。(図8)



図7 電子黒板で学習問題を提示



図8 3等分する動画を電子黒板に表示

(わくわく算数5 (デジタル教科書), 啓林館, p. 138 より引用)⁷⁾

④1年国語「えをみてはなそう」

- 本時目標 絵を見ながら話型に合わせて尋ねたり、質問に答えたりすることができる。
- 学習問題 絵を見て聞いたり、答えたりしよう。
- ICT の活用
 - ・デジタル教科書の景色の絵を電子黒板に拡大表示し、聞いたり、答えたりする話型の練習をクラス全体でおこなう。(図9)

授業の仕方をどのように教えたらよいか



図9 絵を見て話そう

(こくご1年上 (デジタル教科書), 光村, pp. 26-27より引用)⁸⁾

⑤4年算数「直方体と立方体」

- i 本時目標 立方体の展開図をかくことができる。
- ii 学習問題 立方体の展開図をかこう。(図10)
- iii ICTの活用
 - ・正方形を組み合わせて立方体の展開図を作り、デジタル教科書のシミュレーション機能で確かめる。(図11)

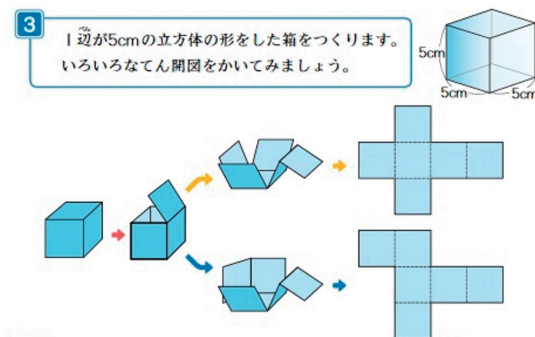


図10 学習問題を電子黒板に提示

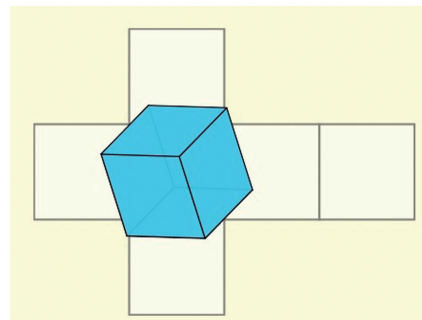


図11 立方体展開図のシミュレーション

(わくわく算数4下 (デジタル教科書), 啓林館, p. 93より引用)⁹⁾

4. 授業の法則について

大学における模擬授業演習で学生達にコメントしてきたことを基に、授業の法則を以下のようにまとめた。これらの法則は、通常の小・中学校の授業においても通用すると思われる。これらの授業の法則に照らして学生の模擬授業の評価をすることにより、授業改善の方向性を学生達自身で把握することが可能になると思われる。

(導入場面)

1. 一番大事なのは、健康・安全である。
2. 授業の成否は準備次第で決まる。
3. 事前アンケートで児童・生徒の実態を把握する。
4. 授業には、導入、展開、まとめがある。
5. 授業の流れの基本は、問題把握、自力解決、グループ内発表、全体発表、まとめである。
6. 導入の基本は、意欲の喚起（教師実験、クイズ、身近な話など）である。
7. めあてのない授業はない。
8. めあては児童・生徒に決めさせる。
9. 初めに今日の計画を提示する。
10. 授業の流れは、発問で決まる。

(展開場面)

11. 授業形態に変化をつける（一斉、個別、グループ、ペア学習など）。
12. 読むだけでもいろいろな方法がある。範読、斉読、群読、朗読、個別読みなど。
13. 児童・生徒に発言させながら授業を進める。
14. つぶやきを拾って授業を展開していく。
15. 全員参加を心がけることにより楽しい授業となる。1人1人を活動に参加させる。
16. 承認は、生きる力の原動力となる。
17. 信頼を得る基本は、ほめることである。
18. 楽しくなければ授業ではない。教え込みにならないように。
19. ゲームや活動を取り入れる。
20. 活動させたら机間指導をする。
21. ノートの元は、教師の板書である。板書を計画的に。
22. 板書は、学習課題、話し合い、まとめなどに分割する。
23. 資料提示や子どもの考えの提示には電子黒板が有効である。
24. 新しい学びには、電子黒板とタブレット PC、デジタル教科書が有効である。
25. 子どもに恥をかかせない。間違えさせない工夫や失敗のフォローが必要。
26. 学級経営の基本は、計画、公平、愛情、効率などである。
27. 児童・生徒を追い詰め過ぎないようにする。「角を矯めて牛を殺す」の諺あり。
28. 個別指導も一斉指導も必要である。
29. 切り返しはテンポよく行う。
30. 児童・生徒に無理な要求をしない。発達レベルを考える。

(まとめの場面)

31. めあてとまとめの整合性を考える。
32. 知識の定着は、復習次第である。
33. 授業記録で授業の反省をする。板書、作品、ノートなどを撮影して記録しておく。

(その他)

34. 児童・生徒が楽しければ、保護者は学校を信頼する。
35. 児童・生徒をほめれば、保護者も学校に協力する。

5. 「深い学び」まで到達する授業方法について

「主体的・対話的で深い学び」について、「主体的・対話的な授業」はできるのだが、「深い学び」まで行くことは難しいとの声がある。筆者は、「深い学び」まで到達するための方法は、教科書を使った授業をすることであると考え。教科書は主たる教材であり、教科書を使わない授業というのはあり得ないと思われるが、実際には教科書を使わない授業が行われている。教科書を使わずに、児童の経験を基に授業を行うため時間がかかり、深い学びまで到達することができないと考えられる。詳しくは、「6. 授業方法についての学生達の誤解」で述べる。

6. 授業方法についての学生達の誤解

過去の模擬授業演習において、学生達が授業方法について次のように誤解していることが多いことがわかった。

- ・教科書を見せないで授業した方が、子ども達の考える力がつく。
- ・毎時間の導入では、前時の復習をすることが必要である。
- ・話し合いでは、間違った答えを発表させてもよい。
- ・穴埋めプリントを使用して授業する方がわかりやすい。
- ・授業開始と終了時に、日直などが号令をかけてあいさつする方がよい。
- ・指導書通りではなく、オリジナルの授業をしなくてはならない。

(1) 教科書を見せない授業について

いろいろな小学校において研究授業などを参観させていただくと、授業開始とともに「教科書をしまいなさい。」というような授業が時々ある。教科書を使用しない理由をお聞きすると、算数や理科などでは、問題の答えが教科書に載っているの、子ども達が答えを見てしまって考える力が育たないので教科書をしまわせるとのことであった。小学校時代にこのような教育を受けて来た学生達は、教科書を見せないで授業した方が、子どもの考える力がつくと誤解しているのではないかと思われる。

教科書を見せない授業では、児童の経験から問題を解決していくので導入に時間がかかり、結果として深い学びのための時間が少なくなると考えられる。

〈事例〉 小学校4年社会「事故や事件からくらしを守る」東京書籍

本時目標は、「資料を読み取ったり、自分たちの経験を話し合ったりして、事故や事件はどのようなところで起こりやすいか考え、安全を守るしくみや働きについて関心を持つ。」である。

授業はまず、教科書を机の下にしまわせた後、学区の地図を黒板に掲示し、事故や事件が起きやすい場所はどこかについて話し合った。児童は、自分たちの生活経験を基に意見を出すので、説得力があり共感しながら話し合いを進めることができたが、とても時間がかかり事故のことだけ学習し、事件の学習ができなかった。

もし、教科書を使用したならば、身近な地域の一般的なイラストを見ながら「どのよう

な場所があぶないか」について話し合い、交差点や自転車通行、空き巣、公園の不審者などについて体系的に話し合うことができ、事故のことだけでなく、事件の学習も行うことができたと考えられる。(図12)



図12 「身近な地域のあぶない場所」のデジタル教科書
(新編社会3・4下(デジタル教科書), 東京書籍, pp. 38-39より引用)¹⁰⁾

そして、本授業における深い学びに時間をかけることができる。例えば、事故と事件では、どちらが発生件数が多いだろうかと予想する。児童にとっては交通事故が身近であり、事故の方が事件よりも多いと予想するであろう。しかし、次時の授業で「市の事故や事件の数の変化」のグラフ(図13)から、2015年の事故は約900件、事件は約4900件で

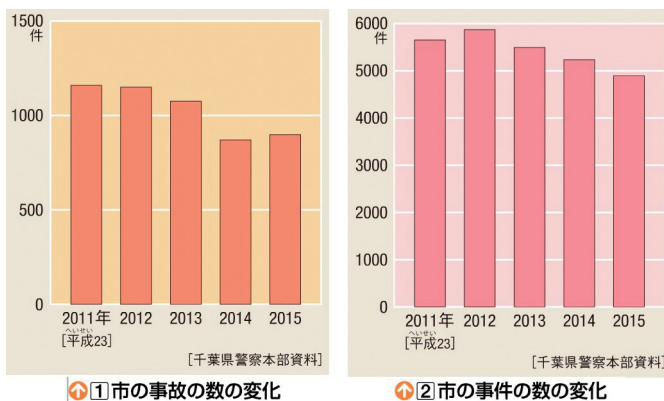


図13 「市の事故や事件の数の変化」
(新編社会3・4下(デジタル教科書), 東京書籍, p. 40より引用)¹¹⁾

あり、事件の発生件数の方が多くてわかる。このことは教科書には書いていないが、児童がグラフから発見することは十分に可能であり、防犯意識を高める上で重要である。このように、教科書に書いていないけれども重要なことを児童が発見するということも深い学びとなる。そのためには、教科書を初めから児童に提示することにより、単なる生活経験を基にした話し合いではなく、教科書を基にして体系的に生活経験を整理しながら話し合いをすることにより授業を効率化し、深い学びのための時間を確保することが必要なのである。

なお、図13のグラフからは、「近年、事故や事件が減ってきているのはなぜだろう。」という問題についても気づき、「事故や事件からわたしたちの安全を守るために、だれがどのような活動をしているのだろう。」という本単元の中心的学習問題を児童がつくっていくことになる。

教科書を使わない授業について、向山・前田（2016）も、プロ教師なら「これはしない16カ条」の第10として挙げている。算数の学力低下の問題は、このまちがった「問題解決学習」にあるといってもよいとも述べている¹²⁾。すなわち、教科書に書かれている答えを見せないで、児童の経験知を基に問題を解決させていくので効率が悪く、時間がかかってしまう授業となるのである。例えば、中学校や高校の数学ではどうであろうか。さすがに、中学や高校では教科書は開いたままである。しかし、教科書に答えが書いてあるからと言って、全員が理解できるわけではない。小学校でも同じである。教科書に答えが書いてあっても、どうしてそのような答えになるのかわからない児童も多いと思う。例えば、円の面積の公式は、 πr^2 であるが、答えがわかっていても、どうして πr^2 で円の面積になるのか説明することは難しい。また、負の数と負の数をかけると正の数になるということは知っていても、なぜそうなるのかを説明することは難しい。よくわからなくても、計算はきちんとできるようになるのである。もちろん、理由を考えようとすることは必要であり、理由がきちんとわかるに越したことはない。しかし、小学校の児童に対してだけ教科書を使わせないというのは再考の余地があると思われる。

なお、算数の教師用指導書にも、「教科書は、算数の内容を児童の発達段階等をふまえて系統的、発展的に学習し、確かな算数の学力を身につけることができるように構成されている。したがって、算数の学習指導は、教科書を使って行うのが基本原則である。」と、教科書を使って授業をするようにとわざわざ記述されている¹³⁾。

(2) 導入場面で復習時間の多い授業について

毎時間の導入では、前時の復習をすることが必要であると考えている学生は多い。確かに、前時の内容について1分程度で簡単に触れることはあってもよいと思うが、前時にしっかりと授業をしていれば復習する時間は必要ない。本時には本時の学習内容があるので、本時の課題を示した後、必要に応じて必要な児童に対して復習をさせればよい。すなわち、1時間1時間の授業を、授業目標に照らしてしっかりと実施することが必要である。

例えば、6年社会科の歴史分野の授業を参観した時のことである。

教師 「前は、大化の改新について勉強しましたね。覚えていますか？」

児童 「覚えていません。」

教師「では、大化の改新について復習しましょう。」

このようにして、約10分間、大化の改新について復習をしていた。これでは、1時間1時間の授業がきちんと行われているのか疑問である。

(3) 児童に、間違った答えを発表させてもよいという授業について

「話し合いでは、間違った答えを発表させてもよい。」という意見があるが、みんなの前で間違えると恥ずかしくなるのが普通である。みんなの前で間違えた発表をした児童のショックは計り知れない。特に、算数は答えがはっきりしていることが多いので、みんなの前で間違えると、算数嫌いになってしまう心配がある。すなわち、教師は学習課題を提示した後、机間指導をするのが普通であり、机間指導の中で、間違えている子にアドバイスしたりして正しい答えにすることが必要であり、少なくとも間違えている児童を指名してみんなの前で発表させることは避けるべきである。ただし、学級会などにおいて、正解のない話し合いの場合には、いろいろな意見を出させることは必要である。

(4) 穴埋めプリントを使用して授業する方がわかりやすいについて

中学校の社会科などの授業を参観させていただくと、穴埋めプリントを使用して授業を進めることが多いようである。社会科では教科書の他に資料集、ワーク、地図帳などの図書があり、50分間の授業で、全ての図書の内容を説明することは難しいので、教師が自作した穴埋めプリントを中心に授業をする方が効率がよいように思える。しかし、これは教師の説明型の授業の場合に言えることであり、アクティブ・ラーニングで生徒が主体的に調べる活動が中心の授業では、穴埋めプリントは生徒の思考力を育てることにならない。特に、穴埋めプリントを中心にして話し合いをすることにより、教科書の記述を中心に話し合いがされないことは大きな問題であると言えよう。

新井（2018）は、高等学校と中学校の教科書と新聞の記述を問題文にした基礎的読解力テストを開発し、25,000人を調査した結果、「中学校を卒業する段階で、約3割が（内容理解を伴わない）表層的な読解もできない。」「高校生の半数以上が、教科書の記述の意味が理解できていません。」と述べている¹⁴⁾。教科書が読めない子どもたちになってしまった原因はいろいろとあるだろうが、学校現場において、教科書を中心とした授業が行われていないことも大きな原因であると思う。

また、西岡（2018）は、東大生たちには当たり前の本の読み方として、章全体・本全体を140字以内にまとめる「要約読み」¹⁵⁾や「本と徹底的に議論する」¹⁶⁾という方法を紹介している。西岡は、この方法に気づくまでは偏差値35であり、この方法に気づいてからは東大模試で全国4位になったという。すなわち、教師が穴埋めプリントで教科書の内容をまとめるよりも、生徒が教科書を読んで内容をまとめたり、教科書の記述から問題点を見つけて議論したりする方が読解力が身につくのである。

なお、ワークシートを使用する場合は、生徒が教科書の内容を要約したり、自分の考えを記述したりする活動があるならば、学習効果が高いと思われる。

(5) 授業開始と終了時に、日直などが号令をかける授業について

いろいろな学校において授業を参観させていただくと、授業開始時と終了時に、日直な

どが「起立、礼、着席」あるいは「これから〇〇の勉強を始めます。」という挨拶をすることが多い。自由時間から授業への切り替えの合図であり、これから始まる授業に集中する意味と、教師に対する礼儀という意味で定着していると考えられる。しかし、これらの号令や挨拶は、本当に必要なものなのであろうか。筆者も小学校教員時代に、最初は日直に号令をかけさせていたが、いつの間にか号令の必要がなくなった。すなわち、児童が学習する楽しさを味わい、授業に集中し、主体的に学習するようになると、号令をかけなくても児童は静かになったのである。時間が来て、教師が黒板の前に立てば、自然に児童は前を見て座り、集中するようになった。ノーチャイムの学校だったので、児童は常に時刻に敏感になり、主体的に行動する習慣が身についていたことの影響もあるかもしれない。教師は「これから〇〇の勉強を始めます。」と宣言し、すぐに授業を始めることができるのである。無理に全員で起立したりする必要はない。

もちろん、大学の授業においても、ノーチャイムであり、授業開始の号令をかけている教師はほとんどいないであろう。学生は主体的な存在であり、教師がマイクで話し始めれば、すぐに授業に集中するであろう。児童・生徒も学習において本来、主体的な存在である。

この点について、向山・前田（2016）も、プロ教師なら「これはしない16カ条」の第1に「毎時、授業の開始の『礼』」を挙げており、「すぐれた教師は、授業開始からすべての子どもたちを引き込む。」と述べている¹⁷⁾。

(6) 指導書通りではなく、オリジナルの授業をしなくてはならないについて

「授業研究」という用語から、教師は新しい授業仮説を設定し、仮説を検証するような授業をしなくてはならないと考える傾向が強い。すなわち、指導書通りの授業計画ではなく、創意工夫のあるオリジナルの授業の研究をしなくてはならないと考える人が多い。確かに、経験豊かなベテラン教師にとってはその通りだと思うが、学生が模擬授業をする場合や、教育実習で授業をする場合には、オリジナルの授業にこだわる必要はないと思われる。何故なら、学生は実際の授業経験がほとんどないので、教科書だけを見て、自分で授業計画を立てることは難しい。とりあえず、指導書を参考にして、一般的な授業をすることができればよい。そして、実践的な授業を積み重ねる中で、創意工夫のあるオリジナルの授業をすることができようになるであろう。

ところで、オリジナルの授業を理想とする場合、指導方法が無限であることを前提にしているが、実際には指導方法はあまり多くはない。教員は日本全国に何万人もいるが、それぞれが違う指導方法を用いているわけではない。

例えば、腕立て開脚跳び越し（跳び箱運動）を指導する場合、「向山式跳び箱指導法」が有名であり、短い指導時間で成功率は95%だと言う¹⁸⁾。他の方法はなかなか見つからない。このように定評のある指導方法ならば真似して取り入れることが必要であり、オリジナルにこだわって、データの裏付けのない思いつきの指導方法は効果が期待できない。

また、算数で、2+3の指導をする場合、おはじきやブロックを使って、2個と3個を合わせて5個と数えることが多い。この時、おはじきやブロックの代わりに、リングやミカンを使ったとしても、指導方法としては、具体物を使った数え方としてまとめることができる。そして、教科書にリングで考える問題があった場合、ミカンで考える問題に変え

たとしても、あまりよい方法とは言えない。教科書にリングで考える問題があったならば、リングで考える方が児童は混乱しない。すなわち、児童が家で教科書を読んで予習や復習をする場合、教科書の内容と授業の内容が一致している方が混乱は起きにくいからである。もちろん、応用問題や練習問題としてミカン等の問題を扱うことがよいのは当然である。

なお、指導書は、料理のレシピに似ている。レシピ通りに作れば、おいしい料理ができるのと同じように、指導書には、このように授業を展開すれば授業がうまくいくという一般的な方法が書いてある。「指導書の内容は信用できない」という声もあるが、それならば、なぜ、小学校や中学校で学校の予算を使って高価な指導書を購入しているのであろうか。指導書は学校関係者だけが購入できるシステムになっていて、値段も高価である。それでも多くの学校で指導書を購入しているという事実は、指導書の内容が信用できるという証拠である。もちろん、指導書よりも優れた指導方法があるならば、その方法を使うべきであるが、その場合でも指導書が教材研究の際の主な参考書であることに違いはない。

従って、経験豊かなベテラン教師が指導書に頼らないオリジナルの授業に取り組むことはよいと思うが、学生が模擬授業をする場合や、教育実習で授業をする場合には、オリジナルの授業にこだわる必要はないと思われる。

7. ま と め

授業の仕方をどのように教えたらいいかについて、模擬授業演習という授業を通して、4つの問題について考察してきた。

第1のICTを活用した授業の方法については、示範授業ビデオを作成し、実際の学校の授業を通して説明するようにした。

第2の模擬授業の事前指導については、授業の法則を提示したり、個別に授業のリハーサルをしたりして授業が成功するよう支援するようにした。

第3の「深い学び」まで到達する方法として、教科書を使った授業をすることを示した。

第4の「授業方法についての学生達の誤解」については、6つの点について詳しく説明し、正しい授業の方法を示した。

今後も、模擬授業演習の授業を通して、授業の仕方をどのように教えたらいいかについて、さらに研究していきたい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 2017 「教職課程コアカリキュラム」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/houkoku/1398442.htm (平成30年9月10日確認)
- 2) 文部科学省 2014 「学びのイノベーション事業実証研究報告書(概要)」 http://jouhouka.mext.go.jp/school/pdf/manabi_no_innovation_report_gaiyo.p (平成30年9月10日確認)
- 3) 坂本徳弥 2017 「模擬授業演習における示範授業ビデオの制作(2)」 椋山女学園大学研究論集 48号 社会科学篇, pp. 131-140
- 4) 坂本徳弥 2018 「中学校における示範授業ビデオの制作」 椋山女学園大学研究論集 49

授業の仕方をどのように教えたらいいか

- 号 社会科学篇, pp. 91-104
- 5) わくわく算数 2 上 (デジタル教科書) 2015 啓林館, pp. 30-31
 - 6) わくわく算数 2 下 (デジタル教科書) 2015 啓林館, pp. 40-41
 - 7) わくわく算数 5 (デジタル教科書) 2015 啓林館, p. 138
 - 8) こくご 1 年上 (デジタル教科書) 2015 光村, pp. 26-27
 - 9) わくわく算数 4 下 (デジタル教科書) 2015 啓林館, p. 93
 - 10) 新編社会 3・4 下 (デジタル教科書) 2015 東京書籍, pp. 38-39
 - 11) 同上書, p. 40
 - 12) 向山洋一・前田康裕 2016 「まんがで知る授業の法則」学芸みらい社, p. 175
 - 13) わくわく算数 6 (指導書第 2 部詳説朱註) 2017 啓林館, p. 4
 - 14) 新井紀子 2018 「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」東洋経済新報社, p. 228
 - 15) 西岡壱誠 2018 「『読む力』と『地頭力』がいつきに身につく東大読書」東洋経済新報社, p. 121
 - 16) 同上書, p. 4
 - 17) 向山洋一・前田康裕 2016 「まんがで知る授業の法則」学芸みらい社, p. 166
 - 18) 向山洋一 2009 「新訂 教育技術入門」明治図書, pp. 150-152